

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『会話を哲学する コミュニケーションとマニピュレーション』

三木那由他 著 | 光文社新書、2022年、304pp.

本書は、会話という行為がなぜ成り立っているのか、またなぜ時には成り立たないのかを(言語)哲学的な観点から考察し、一般書として分かりやすく解説した書である。タイトルにある「コミュニケーション」と「マニピュレーション」は、言語学で一般的に使われている用語で言えば、前者は「発語行為」、後者は「発語内行為」「発語媒介行為」に近い概念だと言えるが、本書での「コミュニケーション」は「発語行為」のように文字通りの意味というだけにとどまらず、話し手と聞き手の間に成立する「約束事」として説明されている点が特徴的である。また本書のもう一つの大きな特徴は、事例をマンガや小説などのフィクションから採っているという点で、会話のコンテキストが具体的であるため、例えば、当事者にとって分かりきった「約束事」をなぜわざわざ言葉にするのか、また、あえて言語化しないことで何を伝えているのかなど、かなり複雑な状況を一般の読者にも明解に説明することに成功している。最終章では近年問題になっているSNSなどでの差別発言にも触れ、「マニピュレーション」の危険な側面についても考えさせてくれる良書と言える。

(評／『彦根論叢』編集委員／出原健一)

『知識と文脈で深める 上級英単語 LOGOPHILIA』

北村一真・八島純 著 | アスク、2022年、464pp.

英単語集の一般的なイメージとしては、英単語に対し日本語の意味と例文が付されている、といったものだろうが、本書はその常識を完全に覆すものである。「社会」「司法」などに章分けされた英文記事を主に採り上げ、その中に出てくる重要な語句をピックアップしているという構成なので、実際に使われている文脈の中で英単語を覚えることができるのと同時に、英文読解力も養うことができる。もちろんこのような構成だけなら他にも類書があるが、特筆すべきは単語についての補足説明である。各単語についての関連情報(接辞・使用域・文法など)が数行程度で説明されているのだが、簡潔であるにもかかわらず的確な情報が盛り込まれているので、読み物としても飽きさせない。単語・熟語を学ぶだけにとどまらず総合的に英語を学べる教材と言えるだろう(無料で英文の音声もダウンロード可能となっている)。

残念なことに近年、「報道の自由度ランキング」における日本の順位は低迷しており、日本国内でほとんど報道されていないことを海外の報道で知ることが多くなってきている。英文記事が読める力をつけることは現代日本では必須となってきていると思われるが、本書はそうした点でうってつけの一冊と言える。

(評／『彦根論叢』編集委員／出原健一)

